

## Effects of wearing sunglasses, as a preventive measure against ultraviolet radiation, on the color discrimination

加來, 卯子  
西南女学院大学短期大学部

<https://doi.org/10.15017/19719>

---

出版情報 : 九州大学, 2010, 博士 (芸術工学), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 :

## 第 2 章

### 紫外線に対する意識とサングラス装着の実態

#### 2.1. はじめに

地球を取り巻くオゾン層は有害な紫外線(UV)を吸収して我々の生活を守っている。しかし、これまでの観測によると、我々が排出するフロンにより全地球オゾン量は 10 年間で約 3%の割合で減少している(二宮 1999)。その結果、地上に届く紫外線量が増加し、皮膚や目など生体への被害が危惧されている。日本は、オゾン層保護対策としての国際条約であるウィーン条約およびモントリオール議定書を的確に実施するため、1988年にオゾン法保護法を制定している(地球環境研究会 2008)。

紫外線は、波長により UV-A、UV-B、UV-C に分類され、波長が短いほど生物に対する有害作用が大きい(環境省 2009)。オゾンはこのうち短波長領域である 280nm 以下の有害な UV-C を吸収することにより、染色体の DNA や細胞の破壊から生体を保護している(及川ら 2005)。気象庁(2006)は、わが国の紫外線量は 1990 年の観測開始以降、長期的な増加傾向がみられることを報告し、特に B 領域紫外線(UV-B)の人体に与える悪影響を指摘している。紫外線は、人間の皮膚、眼、免疫機能の低下など、健康面に影響を及ぼすことが予測されている(今中ら 2007)。

紫外線に対する意識や対策に関して、伊藤ら(2005)は、漁業作業中の紫外線被曝量に関する研究で、漁業では海面反射による被曝を防ぐことは難しく、乗組員個人が、帽子や UV カット機能を持つメガネ・サングラスの着用などの対策を講じる必要があるとしている。佐々木(1999)は、赤道部周辺のシンガポール、中緯度の日本、北極近くのアイスランドで翼状片と白内障患者の割合を比較し、紫外線の多い地域ほど患者数が多いことを報告している。企業が行った調査(ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社(2004))では、4 人のうち 3 人が紫外線は皮膚に悪影響を与えることを知っている一方で、眼に悪影響を与えることを知っている者は過半数を下回っていることを報告している。しかし、

この調査は男女間、地域間で分析されているが、世代間での分析は行われていない。紫外線から目を保護するためにサングラスを装着することは一般に認識されているが、わが国の生活習慣として定着していないため、紫外線に敏感な人や眼科で装着を推奨されている人など、一部の人々の間でしか使用されていないことが推察される。

そこで、本章では、紫外線に対する意識や対策の実態ならびに紫外線対策としてのサングラス装着の問題点について明らかにするために、高齢者と若齢者を対象に調査し、世代別、男女別に分析した。

## 2.2. 調査方法

### 2.2.1. 調査対象者、場所、時期

紫外線に対する意識や対策の実態、紫外線対策としてのサングラス装着の問題点について、次の方法で調査を実施した。

- (1) 調査対象者：対象者の年齢構成群を表 2-1 に示す。若齢者は 18 歳以上の大学生で、ほとんどが屋内で活動している者である。高齢者は、趣味や仕事を持ち、元気に活動し、自立して生活している者である。本研究では若齢者群、高齢者群として年代をまとめた。
- (2) 調査場所：福岡県、長崎県、高知県
- (3) 調査時期：2007 年 7～9 月

### 2.2.2. 調査内容

質問紙調査は、次の内容について実施した。

#### 1) 対象者の概要についての質問

性別、年齢、眼疾患状況および眼の屈折異常、メガネ・コンタクトの使用状況について

#### 2) 紫外線に対する意識についての質問

身体全体を質問の対象にしたため、目に関する項目の他、皮膚に関する項目も含めた。評定は 5 段階尺度とし、評価基準は、5：そう思

表 2-1 調査対象者

年齢	若齢者		高齢者	
	男性	女性	男性	女性
10歳代	77 (34.7)	159 (68.2)		
20歳代	145 (65.3)	74 (31.8)		
60歳代			138 (54.5)	149 (51.0)
70歳代			91 (36.0)	116 (39.7)
80歳代			22 (8.7)	25 (8.6)
90歳代			2 (0.8)	2 (0.7)
平均年齢	21.4歳	19.1歳	69.5歳	69.5歳
SD	2.9	1.2	6.9	7.0
Maximum	18	18	60	60
Minimum	29	25	90	90

人数 (%)

う、4:ややそう思う、3:どちらでもない、2:あまり思わない、1:思わないとした。

3) 紫外線対策の実態についての質問

紫外線対策の程度を 1:行っている、2:時々行っている、3:行っていないの 3 段階で回答を求め、行っている場合、具体的な対策について（サングラス、被服、化粧品等）質問した。

4) 屋外におけるサングラスの使用頻度についての質問

サングラスの使用頻度について、1:使用しない、2:時々使用する、3:頻繁に使用する、4:毎日使用するの 4 段階で回答を求めた。使用する場合、使用場面、使用目的について質問した。また、サングラスを装着することへの抵抗感について、1:ある、2:ややある、3:あまりない、4:全くないの 4 段階で回答を求め、抵抗感を感じる場合、その理由を質問した。

なお、本研究におけるサングラスには、薄い色が付いた視力矯正用の眼鏡を含まない。

5) 本調査は、西南女学院大学倫理審査委員会の審査を受け承認され遂行した。

### 2.2.3. 分析方法

- (1)眼疾患状況および屈折異常、メガネ・コンタクトの使用状況、紫外線対策の実態、サングラス装着に対する実態については単純集計と4グループとのクロス集計に対し $\chi^2$ 検定を行った。紫外線に対する意識については一元配置の分散分析を行った。
- (2)紫外線に対する意識とサングラス装着の実態、眼疾患の有無およびメガネ・コンタクトの使用状況とサングラス装着の実態についてクロス集計を行い、 $\chi^2$ 検定を行った。

## 2.3. 結果

### 2.3.1. 対象者の眼の状況について

対象者の眼疾患状況について表 2-2 に示した。若齢者より高齢者の罹患率が高く、高齢女性の約 40%、高齢男性の約 30%が眼の病気に罹患していた。中でも、白内障を患っている者が多く、高齢女性は 31.6%、高齢男性は 18.9%の者が罹患していた。眼の屈折異常について表 2-3 に示した。若齢者は約 50%が近視であり、高齢者は老視が多かった。メガネ・コンタクトの使用状況を表 2-4 に示した。若齢女性はコンタクトを使用する者が多く、高齢者はメガネを使用する者が多かった。

表 2-2 眼疾患状況

	若齢者		高齢者	
	男性	女性	男性	女性
白内障	1 (0.5)	0 (0.0)	41 (18.9)	78 (31.6)
角膜炎	1 (0.5)	3 (1.4)	1 (0.5)	2 (0.8)
翼状片	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (0.9)	4 (1.6)
緑内障	0 (0.0)	1 (0.5)	4 (1.8)	5 (2.0)
黄斑変性症	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (2.8)	4 (1.6)
その他	11 (5.5)	18 (8.3)	16 (7.4)	10 (4.0)
特になし	188 (93.5)	193 (88.9)	153 (70.5)	149 (60.3)

人数 (%)

表 2-3 眼の屈折異常

	若齢者		高齢者	
	男性	女性	男性	女性
問題なし	81 (36.5)	69 (30.0)	27 (10.8)	24 (8.2)
近視	109 (49.1)	124 (53.9)	55 (21.9)	65 (22.3)
遠視	14 (6.3)	21 (9.1)	18 (7.2)	27 (9.3)
乱視	51 (23.0)	56 (24.3)	66 (26.3)	68 (23.4)
老視	1 (0.4)	0 (0.0)	192 (76.5)	233 (80.1)

人数 (%)

表 2-4 メガネ・コンタクトの使用状況

	若齢者		高齢者	
	男性	女性	男性	女性
全く使用していない	69 (32.9)	60 (27.3)	57 (23.3)	56 (19.2)
コンタクトを使用	57 (27.1)	93 (42.3)	5 (2.0)	6 (2.1)
常時メガネを使用	52 (24.8)	24 (10.9)	93 (38.0)	90 (30.9)
時々メガネを使用	32 (15.2)	43 (19.5)	90 (36.7)	139 (47.8)

人数 (%)

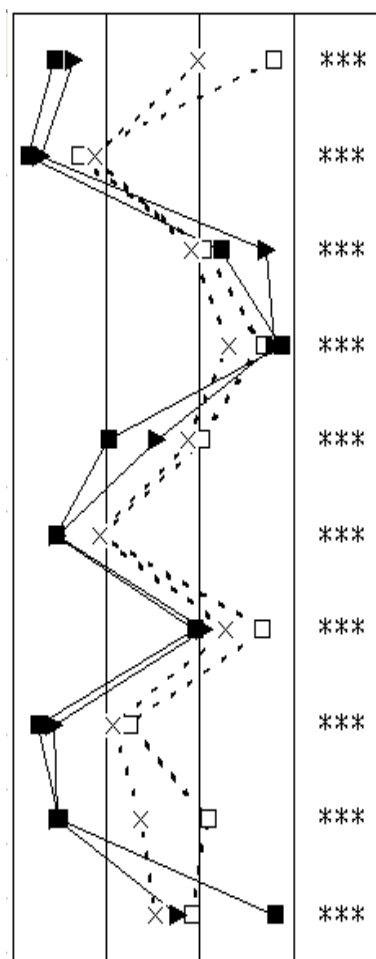
### 2.3.2. 紫外線に対する意識と対策の実態について

紫外線に対する意識について、平均値をプロットした（図 2-1）。その結果、すべての項目で世代および男女の 4 群間で有意差が見られた。特に、「外出時に紫外線が気になる」、「紫外線は皮膚に良くないと思う」、「紫外線は目に良くないと思う」、「紫外線対策を行うことは重要であると思う」、「外出時に紫外線の強さを感じることもある」の項目では、高齢女性、若齢女性の平均値が高く、女性の方が紫外線に対する認識が高い傾向にある。高齢男性、若齢男性も、紫外線は皮膚や目に良くないと思い、紫外線対策を行うことは重要であると思っているが、一方で、若

年齢男性は外出時に紫外線をあまり気にしていない。また、男女とも、目より皮膚に対し紫外線の影響を受けたと感じていた。

思わない  
あまり思わない  
どちらでもない  
ややそう思う  
そう思う

1. 外出時に紫外線が気になる
2. 紫外線は皮膚に良くないと思う
3. 日焼けした肌は健康的だと思う
4. 日焼けすると体が丈夫になると思う
5. 紫外線により皮膚に影響を受けたと感じることがある
6. 紫外線は目に良くないと思う
7. 紫外線により目に影響を受けたと感じることがある
8. 紫外線対策を行うことは重要であると思う
9. 外出時に紫外線の強さを感じる
10. 紫外線は有害であるが、あまり神経質になる必要はない



---□--- 若齡男性    ---×--- 高齡男性  
—■— 若齡女性    —▲— 高齡女性

\*\*\* p < 0.001

図 2-1 紫外線に対する意識

次に、紫外線対策の実施状況を表 2-5-1 に示した。「常に行う」、「時々行う」を合わせると、若齢女性は 83.9%、高齢女性は 79.9%であったのに対し、高齢男性は 49.6%、若齢男性は 19.5%であった。4 グループと紫外線対策の程度とのクロス集計に対し  $\chi^2$  検定を行った結果、有意差が認められた ( $\chi^2(6) = 271.6, p < 0.001$ )。具体的に行っている対策を表 2-5-2 に示した。これらは、紫外線対策を「常に行う」、「時々行う」と回答した者が対象であり、( ) 内はその母数に対する割合である。若齢男性は、「サングラスを使用している」が最も多く、次いで、「長ズボンまたは長いスカートをはいている」が多い。若齢女性は、「紫外線対策の化粧品を使用している」が 88.7%と最も多い。「日傘を差している」は約 50%である。高齢男性は、ほぼ全員が「帽子をかぶっている」と答え、次いで、「サングラスを使用している」、「長袖の服を着用している」が多い。高齢女性は、「帽子をかぶっている」が 82.6%と最も多く、次いで、「日傘をさしている」、「紫外線対策の化粧品を使用している」の順である。「長ズボンまたは長いスカートをはいている」、「長袖の服を着用している」と答えた者も 50%以上いる。これより、高齢者は若齢者より複数の方法で紫外線対策を行っていることが明らかになった。また、女性より男性の方が紫外線対策としてサングラスを使用している者が多かった。

**表 2-5-1 紫外線対策の実施状況**

	若齢者		高齢者	
	男性	女性	男性	女性
常に行う	6 (2.7)	53 (22.9)	33 (13.3)	82 (28.5)
時々行う	37 (16.8)	141 (61.0)	90 (36.3)	148 (51.4)
行っていない	177 (80.5)	37 (16.0)	125 (50.4)	58 (20.1)

人数 (%)



表 2-5-2 紫外線対策の種類

	若齢者		高齢者	
	男性	女性	男性	女性
	43名	194名	123名	230名
サングラスを使用している	27 (62.8)	18 (9.3)	78 (63.4)	67 (29.1)
帽子をかぶっている	11 (25.6)	18 (9.3)	121 (98.4)	190 (82.6)
日傘をさしている	0 (0.0)	95 (49.0)	2 (1.6)	173 (75.2)
紫外線対策の化粧品を使用している	12 (27.9)	172 (88.7)	12 (9.8)	153 (66.5)
長袖の服を着用している	10 (23.3)	35 (18.0)	74 (60.2)	127 (55.2)
長ズボンまたは長いスカートをはいている	18 (41.9)	47 (24.2)	61 (49.6)	133 (57.8)
手袋をはめている	1 (2.3)	14 (7.2)	25 (20.3)	74 (32.2)
日中は外に出ないようにしている	5 (11.6)	16 (8.2)	15 (12.2)	46 (20.0)
その他	2 (4.7)	5 (2.6)	0 (0.0)	2 (0.9)

人数 (%)

### 2.3.3. サングラス装着に対する実態について

サングラスの使用頻度を表 2-6-1 に示した。若齢者より高齢者の使用頻度が高かった。「毎日使用する」、「頻繁に使用する」、「時々使用する」を合わせると高齢男性は約 45%、高齢女性は約 35%が使用していた。 $\chi^2$  検定を行った結果、若齢者と高齢者の間で有意差がみられた ( $\chi^2(9) = 66.3, p < 0.001$ )。サングラスを使用する者に対して使用場면을質問した結果 (表 2-6-2)、若齢男性は、車を運転するとき、外出するとき、若齢女性は、外出するときと答えた者が多かった。高齢男性は、車を運転するときが最も多く、次いで、外出するときが多く、スポーツや釣り、散歩時に使用する者も約 20%いた。高齢女性は、外出するとき、車を運転するとき、散歩の順である。サングラスを使用する理由を表 2-6-3 に示した。若齢者は、「まぶしいため」が最も多く、次いで、「おしゃれのため」と答えた者が多かった。高齢男性は、「まぶしいため」、「目の保護

のため」、「紫外線防止のため」、高齢女性は、「目の保護のため」、「まぶしいため」、「紫外線防止のため」の順であり、「おしゃれのため」と答えた者は10%未満であった。

**表 2-6-1 サングラスの使用頻度**

	若齢者		高齢者	
	男性	女性	男性	女性
毎日使用する	2 (0.9)	0 (0.0)	23 (9.2)	26 (9.0)
頻繁に使用する	8 (3.7)	3 (1.3)	12 (4.8)	7 (2.4)
時々使用する	45 (20.6)	38 (16.7)	77 (30.8)	69 (23.9)
使用しない	163 (74.8)	87 (82.0)	138 (55.2)	187 (64.7)

人数 (%)

**表 2-6-2 サングラスを使用する場面**

	若齢者		高齢者	
	男性	女性	男性	女性
	55名	41名	112名	102名
スポーツをするとき	4 (7.3)	1 (2.4)	24 (21.4)	6 (5.9)
車を運転するとき	36 (65.5)	12 (29.3)	79 (70.5)	44 (43.0)
外出するとき	31 (56.4)	24 (58.5)	50 (44.6)	66 (64.7)
釣り	8 (14.5)	1 (2.4)	23 (20.5)	0 (0.0)
登山	1 (1.8)	1 (2.4)	8 (7.1)	5 (4.9)
散歩	5 (9.1)	4 (9.8)	20 (17.9)	26 (25.5)
その他	8 (14.5)	11 (26.8)	10 (8.9)	5 (4.9)

人数 (%)

表 2-6-3 サングラスを使用する理由

	若齢者		高齢者	
	男性	女性	男性	女性
	55名	41名	112名	102名
紫外線防止のため	18 (32.7)	24 (58.5)	60 (53.6)	68 (66.7)
目じりのしわを防止するため	0 (0.0)	2 (4.9)	2 (1.8)	6 (5.9)
まぶしいため	47 (85.5)	34 (82.9)	89 (79.5)	69 (67.6)
おしゃれのため	35 (63.6)	27 (65.9)	5 (4.5)	10 (9.8)
目の保護のため	18 (32.7)	15 (36.6)	70 (62.5)	71 (69.6)
その他	1 (1.8)	2 (4.9)	4 (3.6)	1 (1.0)

人数 (%)

以上より、サングラスは若齢者より高齢者に多く使用されているが、全体に占める使用率が低い。そこで、サングラス装着に対する抵抗感について質問した。結果を表 2-7-1 に示した。「ある」、「ややある」を合わせると、若齢男性は 38.5%、若齢女性は 65.4%、高齢男性は 35.8%、高齢女性は 52.0%であり、男性より女性、特に若齢女性が抵抗感を抱いていた。抵抗感を抱く者に対して装着しない理由を質問した結果(表 2-7-2)、若齢男性は、「自分に似合わないから」、「サングラスに興味がないから」、「まわりにつけている人があまりいないから」、若齢女性は、「自分に似合わないから」、「まわりにつけている人があまりいないから」、「サングラスに興味がないから」と答えた者が多かった。高齢男性は、「周りの色が正しく見えにくいから」、「サングラスに興味がないから」、「サングラスを着けるのが面倒だから」、高齢女性は、「周りの色が正しく見えにくいから」、「まわりにつけている人があまりいないから」、「サングラスに興味がないから」と答えた者が多かった。世代間で装着しない理由は異なっていたが、「サングラスに興味がないから」は全体に共通した理由であった。

表 2-7-1 サングラス装着に対する抵抗感

	若齢者		高齢者	
	男性	女性	男性	女性
ある	29 (13.3)	42 (18.2)	43 (17.7)	60 (21.1)
ややある	55 (25.2)	109 (47.2)	44 (18.1)	88 (30.9)
あまりない	62 (28.4)	57 (24.7)	79 (32.5)	64 (22.5)
全くない	72 (33.0)	23 (10.0)	77 (31.7)	73 (25.6)

人数 (%)

表 2-7-2 サングラスを装着しない理由

	若齢者		高齢者	
	男性 84名	女性 151名	男性 87名	女性 148名
まわりにつけている人があまりいないから	27 (32.1)	72 (47.7)	21 (24.1)	53 (35.8)
自分に似合わないから	56 (66.7)	116 (76.8)	25 (28.7)	45 (30.4)
サングラスを着けるのが面倒だから	24 (28.6)	31 (20.5)	30 (34.5)	40 (27.0)
周りの色が正しく見えにくいから	26 (31.0)	55 (36.4)	40 (46.0)	63 (42.6)
周りの文字が正しく見えにくいから	14 (16.7)	22 (14.6)	21 (24.1)	40 (27.0)
人に見られるのがはずかしいから	25 (29.8)	56 (37.1)	11 (12.6)	35 (23.6)
おしゃれなサングラスがないから	7 (8.3)	17 (11.3)	2 (2.3)	13 (8.8)
サングラスに興味がないから	38 (45.2)	57 (37.7)	31 (35.6)	51 (34.5)
変わった人、怖い人に思われるから	21 (25.0)	22 (14.6)	22 (25.3)	11 (7.4)
その他	8 (9.5)	6 (4.0)	7 (8.0)	6 (4.1)

人数 (%)

#### 2.3.4. 紫外線に対する意識とサングラス装着の実態との関連について

紫外線に対する意識とサングラス装着の実態についてのクロス集計に対し、 $\chi^2$  検定を行い、有意差が認められた項目を表 2-8 に示した。高齢男性で 5 項目、若齢男性、高齢女性は 1 項目で有意差が認められた。高齢男性、若齢男性は、外出時に紫外線が気になると思う者ほどサングラスを装着する者が多かった。また、高齢男性において、紫外線は目に良くない、目に影響を受けたと感じる者ほどサングラスを使用していた。

表 2-8 紫外線に対する意識とサングラス装着との関連

		若齢者		高齢者	
		男性	女性	男性	女性
サ ン グ ラ ス を 使 用 す る	外出時に紫外線が気になる	$\chi^2(12)=34.8$ $p<0.001$	— —	$\chi^2(12)=46.2$ $p<0.001$	— —
	日焼けすると体が丈夫になると思う	— —	— —	$\chi^2(12)=27.3$ $p<0.01$	— —
	紫外線は目に良くないと思う	— —	— —	$\chi^2(12)=29.0$ $p<0.01$	— —
	紫外線により目に影響を受けたと感じることがある	— —	— —	$\chi^2(12)=61.8$ $p<0.001$	$\chi^2(12)=28.9$ $p<0.05$
	外出時に紫外線の強さを感じることがある	— —	— —	$\chi^2(12)=27.5$ $p<0.01$	— —

#### 2.3.5. 眼疾患およびメガネ使用の有無とサングラス装着との関連について

白内障、角膜炎、翼状片、緑内障、黄斑変性性を患っていると回答した者を眼疾患がある者とし、それ以外の者をない者としてまとめ、眼疾患の有無とサングラス装着との関連についてクロス集計を行った。なお、眼疾患は若齢者より高齢者に多くみられたため、高齢者を分析の対象とした。その結果、眼疾患の有無とサングラス装着の有無との間に関連は認められなかった ( $\chi^2(3)=0.8, p>0.05$ ) (表 2-9)。

メガネやコンタクトの使用の有無とサングラス装着との関連についてクロス集計を行った。メガネを使用する者の方がサングラスを装着し、メガネ使用の有無とサングラス装着の有無との間に関連が認められた ( $\chi^2(9)=25.3, p<0.01$ ) (表 2-10)。

表 2-9 眼疾患とサングラス装着との関連

		サングラス装着の有無			
		毎日使用	頻繁に使用	時々使用	使用しない
眼疾患	ある	13 (8.2)	6 (3.8)	44 (27.8)	95 (60.1)
	ない	20 (6.7)	9 (3.0)	92 (30.7)	179 (59.7)

(% : 「目の病気」に対する比率)

表 2-10 メガネ使用の有無とサングラス装着との関連

		サングラス装着の有無			
		毎日使用	頻繁に使用	時々使用	使用しない
メガネ・コンタクトの使用	全く使用していない	4 (1.7)	5 (2.1)	50 (21.1)	178 (75.1)
	コンタクトを使用	3 (1.9)	5 (3.2)	32 (20.3)	118 (74.7)
	常時メガネを使用	16 (6.3)	6 (2.4)	60 (23.7)	171 (67.6)
	時々メガネを使用	24 (8.0)	14 (4.7)	79 (26.3)	183 (61.0)

(% : 「メガネ・コンタクトの使用」に対する比率)

## 2.4. 考察

紫外線に対する意識 10 項目すべてについて 4 グループ（高齢者男性、高齢者女性、若齢者男性、若齢者女性）で有意差が認められた。女性は外出時に紫外線が気になり、紫外線は皮膚や目に良くないと思い、紫外線対策を行うことは重要であると感じている。一方、男性は紫外線が皮膚や目に良くないとやや思っているが、特に若齢男性は外出時に紫外線をあまり気にしていなかった。また、男女とも、目より皮膚に対し紫外線の影響を感じている傾向にあった。これより、両世代とも女性の方が多く実施していることから、紫外線に対する意識の高さが対策実施の有無に大きく反映していると推察される。

具体的な対策は、若齢男性がサングラスの使用、若齢女性が化粧品の使用、高齢男女は帽子の着用が最も多かった。紫外線対策としてのサングラスの使用は男性が約60%と高いが、女性は低く、特に女性は皮膚の防御を中心に行っていることがうかがえる。三津野ら(2002)の高校生を対象に行った調査では、紫外線に対する意識、対策とも男子より女子の認識が高く、男女差があることを示していた。庄山ら(2007)の調査でも欧米人女性より日本人女性に紫外線が気になると回答した者が多く、日本人が白を好み色白を美しいとする文化から、紫外線による日焼けを意識していることを考察している。本研究の紫外線に対する人々の意識は、これらの研究結果と同様の傾向を示し、特に女性に対する色白志向を反映していることがうかがえる。紫外線対策実施状況に男女差が生じていること、紫外線対策として女性は特に皮膚の防御を中心と考えていることから、今後、皮膚のみならず目も含めた紫外線防御に関する啓発の強化が望まれる。また、大中(1993)は、Leachら(1978)の測定により、週末の紫外線暴露量は1週間の45%に相当すること、職種により違いがあることを報告している。これにより、屋外作業や屋外活動を行う者に対して紫外線に対する対策が必要であると思われる。

サングラスの装着については、若齢者より高齢者の使用頻度が高かった。使用場面は車を運転するときや外出するときが多かった。特に男性は、運転時にサングラス装着の要求が高いことが推察される。また、男性ではスポーツ時や釣りなどアウトドアで活動する場面も比較的多かった。サングラスを使用する理由については若齢者、高齢者とも「まぶしいため」と答えた者が多かった。世代別に見ると、高齢者は「目の保護のため」、「紫外線防止のため」が多く、目の健康を気遣って装着していることがうかがえる。一方、若齢者はおしゃれのためと答えた者が多く、装着する理由について世代間で異なっていた。これより、高齢者はサングラスをプロテクトツールとして、若齢者はファッションツールとして捉えていることが推察された。

サングラス装着に対する抵抗感は、男性より女性に高く、特に若齢女性は65.4%が抵抗を感じていた。サングラスを装着しない理由として、

若齢者は「自分に似合わないから」「周りにつけている人がいないから」など、外観や他者の目を気にしていることが推察される。ファッションの個性化により、服装に対する規範も寛容になっている一方で、周囲と比較することで安心を求めながら行動する人々の様子が見えてくる。高齢者は「周りの色が正しく見えにくいから」など、装着に伴う安全性を問題視していた。視覚特性について、川口ら(2005)は、高齢者は若齢者と比較して色彩弁別能力が劣っており、年齢に関係なく識別し難い色相と加齢に伴って識別し難くなる色相があることを明らかにしている。また、吉田ら(1992)は、黄一色の誤認状況について、色彩の誤認率は加齢により増加し、80歳を過ぎると横ばいになることを報告している。このような高齢者の視覚特性から、サングラスの色が見えに影響することが予想される。現在、さまざまな色のサングラスが市販されている。紫外線対策として効果的で、しかも安全で快適な視環境が望まれるため、今後、視覚特性に配慮したサングラスの色の提案が必要であると思われる。また、全グループでサングラスを使用しない理由に対し、「サングラスに興味がないから」と答える者が多く、わが国では、目を保護するためにサングラスを装着する意識が薄いことがわかる。

紫外線に対する意識とサングラス装着の実態との関連では、特に、高齢男性において、紫外線を意識し、目に良くない、目に影響を受けたと思っている者ほどサングラスを使用していた。高齢男性は4グループの中で日常生活においてアウトドアでの活動が比較的多かったため、目に対する紫外線の影響を意識しているのではないかと思われる。メガネ使用の有無とサングラス装着の有無との関連では、メガネを使用するの方がサングラスを装着する者が多かった。メガネのレンズはほとんどUV-Bを通さないが、サングラスを装着することによる眩しさの減少、見えやすさへの期待感など、人々がサングラスの有効性を求めていることが推察される。